ねくすとタイガー！

真澄 十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねくすとタイガー！

【Ｎコード】
Ｎ６２９９Ｋ

【作者名】
真澄　十

【あらすじ】
この「ねくすとタイガー！」は真澄十による「Ｆａｔｅ／Ｎｅｘｔ」の番外編タイガー道場だよー！完全に蛇足となっているから、見なくても支障は無いんだって。
でもこの私、イリヤの唯一の見せ場だから、見ないヤツはぶっ■してあげるんだから…
この作品はＦａｔｅ／Ｎｅｘｔで語られることの無かった（無いであろう）小話、ボツネタ、裏話を暴露するコーナーだってタイガー

が言ってた！

あと、本編の雰囲気を著しくぶっ壊す可能性があるから、注意してね、みんな！

第一話　ランサーとアーチャー（前書き）

このコーナーは、同作者による「Ｆａｔｅ／Ｎｅｘｔ」の番外編だよー！

今回のお話は、本編である「Ｆａｔｅ／Ｎｅｘｔ」の第八部、「Ａｃｔ．７　乱入」までの情報に基づいているから、イリヤは先にそっちを見ることをお奨めするなー。

あと、感想とか評価は本編のほうにして欲しいって言っていたよ！別に守らなくても構わないそうだけど、一応は気に留めておいてね！

第一話　ランサーとアーチャー

「本編に私が出ないとはどういう了見かぁ～～～～！！」

「し、ししょー！落ち着いてください！」

「ええい、これが落ち着いていられるか！であえ、であえーー！！」

「私なんか死んでいるんですよ！」

「きさまのようなロリっ子にはそれで十分だ～～～！」

「わぁむちゃくちゃだー！」

「ぜぇ…ぜぇ…」

「ししょー。もう若くないんだからムリしちゃダメですよ。」

「やかましい！喝」

「あいたっ」

「弟子一号よ！このコーナーの趣旨を問いたい！」

「押忍！このコーナーは、『Ｆａｙｅ／Ｎｅｘｔ』で語られなかったボツの話や、裏話、小話を暴露するためのコーナーです！」

「宜しい！つまりこのコーナーがＮｅｘｔを支えていると言っても過言ではなく、『むしろこっちが本編なんじゃね？』と読者の皆様方も思っていることだろう！」

「…その実、本編で圧倒的に不足しているギャグ成分を補おうというのが本音だそうだけど。」

「…自らの力量不足をこんな形で解消しようとするとはけしからん！しかも私と弟子一号をギャグ要因にするとは～～…喝！喝喝喝喝！」

「ししょー…作者をたたきにしても一銭の得にもならないよー？」

「うーむ…よし、今回はミンチになったことで許して進ぜよう。感謝するがいい。」

「んじゃー、クソ野郎が一人消えたところで、コーナーを進めるよー。」

「とは言っても何から始めたらいいのか。」

「とりあえずはランサーとアーチャーについてお話しろ、ってさっきミンチが言っていたよ。」

「そうか！では先ずランサーについて語ろうではないか。ではステータス情報を貼り付けるぞよ。本編に貼り付けているものと同じだから、飛ばしても良い！」

【クラス】ランサー
【マスター】スカリエッティ・ラザフ・コンチネンツァ
【真名】ガイウス・カッシウス
【性別】男性
【身長・体重】１８２ｃｍ　８０ｋｇ
【属性】中庸・善
【筋力】Ｂ　【魔力】Ｂ
【耐久】Ａ　【幸運】Ｅ
【敏捷】Ａ　【宝具】ＥＸ

【クラス別能力】

対魔力：Ｃ
第二節以下の魔術は無効化する。大魔術や儀式呪法などを防ぐことはできない。

【保有スキル】

聖眼：Ａ
神の血を目に受けたときに得たスキル。魔眼とは異なる。外界からの視覚に対する干渉をほぼ無効化する力をもつ。
視覚によって外界へ干渉する魔眼とは対極にあるといえる。魔眼に対しても強い耐性を発揮する。

戦闘続行：Ａ
往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。
彼の宝具によって、もたらされたスキルである。

【宝具】
神の血（ロンギヌス）を受けし槍：ＥＸ
対人宝具・レンジ１～２・最大捕捉人数１

絶対の回復能力をもつ槍。彼の自己治癒も、この宝具による副産物である。
持ち主に「世界を制する力を与える」という伝承があり、ランサーはこれによって全体的な補正がかかっている。もともとの彼はさほど戦闘能力は高くない。
非開放時には、持ち主の傷を自動的に癒す力しか持ち得ない。
開放時には、致命傷であっても瞬時に回復する力をもつ。これは外傷に限らず、病や呪いの類すらも退ける力がある。また、使用する対象は自分に限らず、開放　時の槍で刺したならば例え敵であっても癒すことができる。

「うーん…ちょっとコイツ強すぎね？」

「だよねー。本編でもかなり活躍していたしねー。」

「作者曰く、『純粋な戦闘能力なら作中最強にするつもりだった』そうな。それにしたってステータスにＡやらＥＸが目立つなコイツ。」

「だよねー。まぁ、私のバーサーカー（ヘラクレス）なら一瞬でミンチだけど。」

「お、恐ろしい子…」

「幸運についても、神の加護を受けていそうだから高めに設定するつもりだったそうだけど、さすがにそうなると強すぎだろって思ったそうよ。一つくらいは不得手がないとマズイって思ったのね。」

「そうねー。パーフェクト超人はこの物語には必要ない！才色兼備、文武両道のパーフェクト美人はこの私だけで十分だけである！」

「…ふっ。哀れねタイガー。誰にも言ってもらえないからって自分で言うなんて。」

「（＃＾ω＾）ビキビキ」

「さ、最初は戦いながら、あの一大宗教の聖句を唱える設定だったそうだよ。」

「聖句を呟きながら、不死身に近い自動治癒…それなんてア〇デルセン？」

「王立国教騎士団が黙っていなさそうだよねー。というワケでキャラが被りかねないので聖句はボツになったそうだよ。」

「まぁ仕方ないねー。パクリはいかんよ、パクリは。」

「とは言っても、作者は諦めていないみたいよ？キリエ・エレイソンくらいは使わせたいって言っていたわ。聖職者だからってどうしても使わせたいみたいね。」

「mjk」

「そうそう、本編の感想欄でもちょこっと触れたんだけど、ランサーは直前まで二択で迷っていたんだって。」

「うむ。聖ロンギヌスか聖ジョージかだったな。おお神よ！アーメン！オーメェン！エィィイメェエン！」

「おーい返ってこーい。で、聖ジョージといえば竜殺しの『アスカロン』が有名なんだけど、この竜殺しのエピソードをうまく活かせそうもないから、あえなくボツになったんだって。」

「本編に、本家のセイバーちゃんが登場していれば良かったのかも知れないけどねー。」

「まぁ仕方ないでしょ。オリ主にセイバーを召喚させることが決まった瞬間から、聖ジョージは登場しない運命だったのよ。」

「マスター…というか、登場人物は殆どオリジナルだよね。」

「そうね。一応、それぞれに個性を出そうと苦心はしたそうよ。とりあえずスカリエッティ・ラザフ・コンチネンツァはランサーと対照的なキャラにしようと思ったらしいわ。」

「へー。なんかスゴい仲悪そうなのは、駄文の中からも伝わった気がしたりしなかったり。」

「なんとなく作者の中には、『ランサー陣はマスターに悩まされなきゃダメだろ』って気持ちがあったそうよ。」

「ああ、哀れランサー…」

「まぁ、主人公に近い位置にいるセイバーにその役目はムリでしょ。暗すぎて。結果的に、他の武士とか騎士っぽいクラスにそのお鉢が回ってくるのよ。ランサーかアーチャー、あるいはライダーあたりにね。」

「主人公といえばイリヤちゃん、澪ちゃんはあまり活躍しないね。一応は主人公のつもりなんでしょ？」

「そうねー…これについては、作者の力不足としか言えないわ。今後は八海山澪にスポットライトを当てるように留意して執筆したいそうだけどね。この物語は、八海山澪を主軸にして回す予定だそうだけど、彼女の為の物語じゃないそうだから、仕方ないことなのかも知れないけどね。」

「ん？どういうこと？」

「あまり深いことは言えないわ。本編のネタバレになりかねないもの。まぁ…この程度は読者もうすうす感付いているじゃない？」

「ふーん。よくわかんないなー。」

「タイガーはそれでいいのよ。」

「む。なんかバカにされているような。今宵の虎は血に飢えておるわ！」

「し、ししょー！虎竹刀で百叩きだけはカンベンしてください！あ、お尻はラメェ！」

【Ｗｅａｐｏｎに『虎竹刀』が追加されました】

「さて、次はアーチャーについて。弟子一号、ステータス情報を張りなさい。」

「はーい…うぅ、お尻が痛い…」

【クラス】アーチャー
【マスター】アリシア・キャラハン
【真名】サー・トリスタン
【性別】男性
【身長・体重】１８０ｃｍ　６５ｋｇ
【属性】秩序・善
【筋力】　Ｂ　【魔力】　Ｂ
【耐久】　Ｂ　【幸運】　Ｃ

【敏捷】　C　　【宝具】　A

【クラス別能力】

対魔力：D
一工程による魔術を無効化する。
効果としては魔除けの護符程度なので、人間の領域のスキルといえるかもしれない。

単独行動：B＋
マスターからの魔力供給が無くなったとしても現界していられる能力。ランクBは二日程度活動可能。
プラス補正により、魔力の温存次第ではさらに一日程度の活動も可能。

【保有スキル】

鷹の目：　C
純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。
高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

陣地選定：　B
自分に有利な陣地を選定し、地の利を最大限に活かす能力。
ランクBは有利な位置関係を維持する限り、アドバンテージを決して失わない。

【宝具】
無駄なし必中の流星（フェイルノート）：Ｂ
対人宝具・最大捕捉人数１

因果律の逆転により、必ず命中する矢を放つ。命中箇所は任意で設定可能。
その矢の形状により貫通力は凄まじく、半端な防御では確実に貫かれる。Ａランク相当の防御手段でも、投擲に対する補正がなければ防御は困難。
ただし回復阻害などの付加能力は持ち得ない。
さらに、遠方の敵には使用できず、射程はおよそ１００メートルである。

「ロリコン。以上！」

「きゃー！たーすーけーてー」

「貴様はもはや少女といえる年齢ではなかろうが！士郎よりも年上ではないか！」

「タイガー…ブーメランって知っている？」

「うぐ、…（⊂　。д。）アーアーきこえなーい」

「…。コイツはロリコンにしたかったワケじゃないそうよ。単にフェミニストなだけらしいわ。まぁ、ロリコンになりかねない表現があったのは確かだけど。」

「だよねー。幼女の敵だよねー。極刑に値する、喝！」

「まぁ、本編で膝を粉砕されているから良しとしてあげましょう、タイガー？」

「足りぬ！さらに地蔵を抱えて正座三時間の刑だ！」

「わータイガー素敵！マーベラス！」

「ふぉっふぉっふぉ。もっと誉めるが良い。」

「……。」

「あ、あれ？イリヤちゃん？」

「で、作者もロリコンじみた発言を他のセリフに差し替えようとしたんだけど、これが思ったよりも好評だったらしく、退けなくなったそうよ。」

「へ、へー。」

「そしてアーチャーのマスター、アリシア・キャラハンについては早い段階で設定が決まっていたそうよ。名前は直前で決めたらしいけどね。トリスタンの物語でもある、『トリスタンとイゾルデ』を調べている段階で閃いたらしいわ。」

「へー。別に、イゾルデがアリシアちゃんみたいに極端な薄幸の少女だったワケでもないのにね。」

「そうね。でもなんか閃いたんだって。この段階でアーチャーの性格をキザったらしい男卑女尊野郎になることは決定したそうよ。」

「ふーん。先生、差別はよくないと思うなー。先生は女だけど、レディースデーとか一体どうなのよ。」

「でも作者はリヒャルト・ワーグナーのこの作品を見たり読んだりしたことがあるワケじゃないらしいわ。一応、調べられるだけ調べたらしいけどね。だからもしかしたらトリスタンの設定については何かミスがあるかも知れないとビクビクしているそうよ。まぁそれは他のサーヴァント全員に言えることらしいけどね。」

「見切り発車かい！もっとよく調べろよこのクズ作者！喝！」

「アリシアの年齢についても少し迷ったそうよ。でも、『やっぱり薄幸というからには、少女のほうが良いかなー』なんていい加減な理由でロリ要員に決定されたんだって。ロリは私だけで十分だーい！」

「設定資料によると９～１０歳の設定だそうな！こんな無駄な設定を考えたり、病名と症状について真剣に調査したりするヒマがあったら、私をメインに据えたストーリーでも考えろ！死ね！」

「あ、タイガー。ミンチがこんなもんでいいってー。」

「うむ。そうであるか。このタイガー道場は不定期に更新される！あまり期待せずに全裸で待機しているがよい！」

「じゃあね、バイバーイ！」

【タイガースタンプが押されました】

第一話　ランサーとアーチャー（後書き）

あらすじ、前書きは全てイリヤ口調。本文は本家のタイガー道場に倣って会話のみのコンセプトで書いてみました。
如何だったでしょうか？

やはりギャグは苦手だ…

この「ねくすとタイガー！」は本編の片手間で更新されるので、確実に不定期更新となります。
大河せんせーの言うように、まったりとお待ちください

第二話　全ての始まり（前書き）

今回のお話は、本編である「Ｆａｔｅ／Ｎｅｘｔ」の第九部、「Ａｃｔ．８　指南と交渉」までの情報に基づいているから、イリヤは先にそっちを見ることをお奨めするなー、お兄ちゃん☆

第二話　全ての始まり

「「ねくすとタイガー！始まるよー！」」

「今回も、うら若き乙女こと藤村大河と！」

「可憐な少女、イリヤがお届けするよー！」

「ついに二回目だねー、弟子一号。不定期とは言ったけど、かなり遅い更新だったね弟子一号？」

「そうねタイガー。作者が、『ある国家資格のために勉強する』って言っていたケド。」

「どーせ付け焼刃で勉強したんでしょ。」

「みたいですねー。だけどこのタイガー道場は試験終了後に速攻で書いたそうよ。なんでも『テンションだけで書ける（書いている）から楽しい』だそうです。」

「うーむむむむ。それっていい意味なんだろうか。どう思うよ弟子一号」

「さあ？とりあえず続いているんだから良しじゃない？このコーナーいつ終わるか分かんないし。」

「おお！つまり永久に続く可能性もあると！？」

「…あくまで本編の裏話や小話がメインだから、それは無いと思う

けど？」

「ファック！やはり作者はミンチがお似合いか！？」

「タイガー、そんなコトしてもつまんなーい。シロウをお人形にするほうがいいー！」

「な、なんという悪魔っこ…ええい、士郎は渡さないんだからー！」

「あいたっ」

「むむ、カンペがやってきた。何々、『そろそろ始めろ』？『今回は、そもそものＦａｔｅ／Ｎｅｘｔの始まりについて』？」

「じゃあししょー！早速始めましょうか！」

「うむ！」

「まずは『Ｆａｔｅ／Ｎｅｘｔの始まり』についてだねー。」

「つまり、何故作者がこれを書こうと思ったのか、というコトであるな弟子一号！」

「そうであります、ししょー！」

「ふーむ。きっと何か深淵なる思いがあってのことに違いない…。」

「いや、そもそもの始まりは酒の席での勢いだそうよ？」

「なん…だと…？」

「順を追うと、友人と酒を飲んでいるときに、何故か『衛宮切嗣がサーヴァントになったら何か？』という話になったそうよ。」

「ふむ。この人とはしょっちゅう呑んでいるらしいな。」

「らしいねー。で、『そこはアサシンだろ』という話になったそうよ。」

「アーチャーとかも無きにしも非ずだけど、やっぱアサシンだよねー。」

「で、『じゃあ衛宮切嗣がアサシンの二次創作書くよ』ってなったそうよ。」

「そ、そんな適当な…。」

「ねー。キリツグは世界と契約しているワケでもないから、サーヴァントになっているコトは無いと思うけどね。」

「うむ。まあ、そこは一応の設定は用意しているコトだろう。この駄作者のことだから、原作に矛盾しまくりのアホらしい設定に違いないが。」

「まあ、何も用意していないよりはいいでしょ。一応は無い知恵を搾り出して考えた設定らしいし。」

「ふむ。きっとすぐに明らかになるだろう。」

「で、続きだけども。『となると、他のサーヴァントも色々考えた

い。いっそもう一度聖杯戦争しようぜ！』というスタンスから始まったそうよ。」

「えー…なんかいい加減だなー。」

「そうね。発端はいい加減かも知れないけど、一応は色々考えてプロットを制作したそうよ。ＵＢＷ後にしたのにも、一応意味があるそうだしね。」

「へー。」

「ちなみにライダーはその人の希望で決定されたらしいよ。他にも色々候補が上がっていたらしいけどね。」

「へー。どんな？」

「作者は酔った勢いで、『バイキングとかどうだ？』と言ったらしいわ。今思うと、ボツになって良かったかも、と思っているそうよ。基本的には友人の強い希望により、ライダーは決定されたそうよ。」

「バイキングは私もちょっとどうかと思うなー。冬木市で活躍できるのかなぁ。弟子一号よ、他には？」

「いい機会だから他のサーヴァントについても候補に挙がっていたのを紹介するねー。セイバーに関しては、日本の侍も候補だったそうよ。」

「それは真か。あかよろし。死に方用意！」

「何言ってるのタイガー…？例えば、『童子切安綱』の源頼光とか、

『大通連』の鈴鹿御前という鬼の姫とか。果ては『布都御魂（フツノミタマノツルギ）』とかね。」

「フツノミタマは剣自体が神様なんだよね。」

「ええ。もしも聖杯が神すらも召喚していたら、まず間違いなくフツノミタマだったそうよ。真名：フツノミタマ。宝具：布都御魂（フツノミタマノツルギ）という感じで」

「多分作者のことだからロリババアという設定で出していただろうな。」

「多分ね。というか間違いなく。ロリは私だけで十分だーい！」

「よし、次！アーチャーの候補は何があったのか？」

「アーチャーはかなり困っていたそうよ。弓の英雄となると、神様そのものっていうパターンが多いのよねー。」

「なるほど。そもそも弓の宝具が剣や槍に比べてあまり無いこともあるだろうねー。」

「ちなみに、作者的にはちょっと書いてみたかった人物が居るそうよ。」

「へー、だれだれ？」

「シモ・ヘイヘ」

「…は？」

「伝説のスナイパー。シモ・ヘイヘよ。」

「ちょ…キリツグさんとかぶってない？」

「だからトリスタンを見つけたときは、『もうコイツしかない』って思ったそうよ。」

「な、なるほど。では次。ランサー…は前回を見るべし。次、キャスター！」

「キャスターはあまり困らなかったそうよ。最初は『マーリンとか如何か』と作者が言っていたんだけど、あえなくボツ。」

「マーリン…それはどうなのよ。アーサー王物語から出すぎでしょう。」

「だよねー。まぁ、キャスターは調べている段階で目にして、即決されたそうよ。実際に反英雄といえるのかは、作者による補正も無きにしもあらずってカンジかしら。」

「少なくとも作者は反英雄っぽいと思える人物なんだよね？」

「そうよ。ちなみに私と同郷。」

「へー。ドイツの人なんだ。ぐーてんもるげん。」

「私と同郷の英雄を反英雄に仕立て上げるなんて…このクズ野郎はやっぱり■■してあげるべきかしら―――」

「ちょ、弟子一号？おちつけ！」

「ふふ、冗談よ。じゃあ最後にバーサーカーね。これも面白い人物が候補に挙がっていたわね。」

「ふむふむ。呂布とか？」

「それも候補だったそうだけど、直前まで生き残っていた候補がいるわ。」

「だれだろう？」

「エミヤシロウよ」

「ちょ！そんなの許さないんだからァァァァァアアア！！」

「ええ。さすがに有り得ないだろうというコトでボツになったそうよ。」

「当然よ！士郎は朴念仁で女たらしだけど、バーサーカーなんてお姉ちゃん許しません！」

「そうねー。特にＵＢＷ後だと有り得ない印象よね。というワケで、結局別の人物になったワケよ。」

「今回のバサカって第四次のバサカに似ているよね？」

「ランスロットね。そうねー、作者もなるべく似ない設定にしたかったそうよ。でもいくら考えても良い設定が思い浮かばなかったから、ランスロットと似た設定に甘んじることになったんだって。」

「別人であることは間違いないんだよね？」

「ええ。間違いないわ。」

「へー…。あ、作者がこんなもんでいいってー。」

「じゃあ皆、またねー！」

「次はいつになるか分からないけども、気長に待っていてねー！」

【タイガースタンプが押されました】

第二話　全ての始まり（後書き）

今回は前回にあった顔文字を止めました。ちょっとはじけすぎだったかなーって思ったもので

第三話　キャスター

「ねくすと！」

「タイガー！」

「第三回も私ことイリヤと！」

「パーフェクト美人、藤村大河がお送りする！」

「ししょー、第三回はかなり遅かったですね」

「うむ。アホ作者は大学生なのだが、何やら時間的な意味で鬼畜な課題を出されたらしく、それに翻弄されていたらしい。おかげで本編も遅れがちになり、番外編など書く余裕がなかったらしい」

「言い訳ですねー」

「全く以ってそのとおり！虎竹刀の錆となれい！」

「ししょー。この際だから作者のコトを紹介するっていうのはどうでしょうか！」

「おお、それはいい。では弟子一号、作者のプロフィールを読み上げよ！」

「おす！えーと、名前は真澄十。もちろんペンネーム。性別は男、２１歳。現在大学在学中で一人暮らしだそうです。趣味は読書と執筆活動、あとは酒と麻雀だそうです」

「趣味が読書っていわゆる無趣味じゃないの？」

「うーん…実際に作者は年間を通してさほど読むわけじゃ無いみたい。大体２０冊くらいだって。多いときはその倍以上は読むらしいけど。でも気に入った本は何度も読み返すそうよ。空の境界なんかは５・６回ぐらい読み返しているみたいだよ」

「えー。先の展開が分かっているからそんなに読み返して面白いの？」

「面白いんだって。他の人は知らないけれど、気に入った言葉や印象深かったシーンをＰＣのメモ帳に残すクセが昔からあったんだって」

「ほう。例えばどんな？」

「メモ張から適当に抜粋。これは『男たちの大和』からね。正確には戦艦大和の哨戒長臼淵大尉が実際に残した言葉だそうだけれど、これを最初に見たのが『男たちの大和』だったそうよ」

敗れて目覚める
これ以外にどうして日本が救われるか
今目覚めずしてどうして救われるか
俺たちはその先導になるのだ
日本の新生に先駆けて散る
まさに本望じゃないか

「なるほど。こんなカンジに琴線に触れた言葉を残しているワケね」

「ええ。昔は特に意味も無く残していたそうだけれど、今となってはこのクセに感謝しているそうよ。おかげで自分がどういう文章が好きなのかよく分かったって言っていたわ」

「ふーん…で、酒も趣味ってなに？」

「なんとなく思っている人も多いと思うけれど…Ｆａｔｅ／Ｎｅｘｔでは結構酒が出ているわ。例えばライダーが葡萄酒を飲んでいたり、澪のバイト先が居酒屋だったり」

「あー、確かにそうねー」

「この辺は作者の趣味丸出しだそうよ。作者の家系は酒が大好きらしくて、作者自身もその例に漏れなかったらしいわ。酒を覚えてからは自他共に認める酒好きよ」

「そういえば、士郎の昔のバイト先は酒屋だったわね」

「作者曰く、『天国だろ』だそうよ。主に日本酒を愛飲していて、旨いと聞いた酒はネットで取り寄せて実際に飲んでいるみたいね」

「へー。そんなワケで何かオススメの酒があったらコメントよろしく！」

「作者についてはこんなものでいいかな。じゃあ次は今回明らかになったキャスターについて」

「うす！じゃあステータスを貼りますね、ししょー！」

【クラス】キャスター
【マスター】間桐慎二
【真名】ゲオルグ・ファウスト
【性別】男性
【身長・体重】１７４ｃｍ　６５ｋｇ
【属性】混沌・悪
【筋力】　Ｅ　【魔力】　Ａ
【耐久】　Ｄ　【幸運】　Ｂ
【敏捷】　Ｅ　【宝具】　Ａ＋

【クラス別能力】

陣地作成：Ｂ
魔術師として有利な陣地を作り上げる。工房の作成が可能。

道具作成：Ａ
魔力を帯びた道具を作成できる。いずれは不死を可能にする薬を作ることもできる。

【保有スキル】

精神汚染：Ｃ
精神がやや錯乱しているため、他の精神干渉系魔術を低確率でシャットアウトできる。

このレベルであれば意思疎通に問題は無い。

知識探求：Ｂ＋

未知に対する欲求。未知のものに出会っても短時間で混乱から立ち直り、それを理解する。

また、自分が扱う魔術体系の魔術であれば、低確率でそれを習得できる。

【宝具】

留まれ、お前は美しい（グレートヒェン）：Ａ＋

対界宝具・レンジ１～９９９

キャスターとその宝具を対象にする宝具や魔術を無効化する。特に宝具に対する耐性が高い。

真名開放して使用するタイプの宝具に対してはキャスターも真名解放する必要がある。

キャスターとその宝具を対象にしないものについては全く効果を発揮できない。また、これの発動にも魔力を消費しているため弱い魔術に対しては使用すること　は有効ではない。

腐臭を愛する大公（メフィストフェレス）：Ｂ＋

対軍宝具・レンジ１～５０

死者の肉体を蘇生させ、そこに人口の魂を封印することで擬似的なホムンクルスを生み出す。

不死性も不完全ながら命のエリクシルの理論を応用しているため、封印された魂が現存する限り復活する。

しかしその魂が剥がされた場合にはただの死体に戻ってしまう。

「この宝具ちょっとチートじゃないかね、弟子一号」

「ほんとにそうですよね。作者もそのあたりがチートになり過ぎないように注意しているそうですよ」

「宝具を無効化する宝具かー。上条さんかっての。そげぶ」

「ちょ、ししょー！クロスものでもないのに別作品出すのはどうなんですか！しかもししょー『インデッ〇ス』知らないでしょ！」

「こまけえこたぁいいんだよ！いっそ出しちゃえばいいのよ上条さんを！ついでに私と士郎がネチョネチョする話とかも！」

「そげぶ！それはそげぶせざるを得ない！」

「そげぶすると申すか！謀った噛…謀ってくれた噛…」

「はいはい分かった分かった。ロクに知りもしないネタを出すのは止めておこうねタイガー」

「むう…イリヤちゃんが冷たい。ところで、ファウストのホムンクルスとアインツベルンのホムンクルスはどう違うの？」

「アインツベルンのホムンクルスは基本的に一から構成するものよ。けれどファウストのものは死霊術を組み込んで、死者を復活させることを目的としたホムンクルスね。でもやっぱり難しいらしく、ゾ

ンビや死徒みたいな出来損ないみたいねー。外道に落ちるからこうなるのよ、いい気味ね」

「ふむふむ。なるほど、わかんない」

「……とりあえず全く違う流派だと考えればいいと思うわ」

「なるほど。つまり士郎と全く同じ士郎二号を作り出して私とネチョネチョする話も…」

「ストーーップ！そげぶ！そげぶ！」

「三号はイリヤちゃんにあげようではないか」

「手を結びましょう、タイガー」

「ふぉっふぉっふぉ…ヌシもワルよのう…」

「てなトコで今回はここまで！次回がいつかはわかんないけれど、多分まだ続くよ！」

「次回まで私と士郎が○○する妄想でもしているがよい！ではまた会おう！」

【タイガースタンプが押されました】

第三話　キャスター（後書き）

昨晩酒を飲みながら執筆しました。二日酔いを誰かそげぶしてください。

相変わらず次回は未定。のんびりとお待ちください。

第四話　澪で遊ぼう（前書き）

Ｆａｔｅ／Ｎｅｘｔの番外編です。そちらが未読の方は、さきに本編を読むことを推奨します。

第四話　澪で遊ぼう

タイガー「前回から二ヶ月以上経っているではないかッ！！　死ねエッ！！」

イリヤ「きゃー♪　ですとろーい！」

タ「怠慢！　なんたる怠慢。いくら本編のオマケ的位置づけとはいえ、二ヶ月というのは遅すぎるのではなかろーか！」

イ「タイガーステキ！　そのまま作者を火星までぶっ飛ばしちゃえ！」

タ「北斗！　有情破顔拳！」

北斗有情破顔拳

＼　テーレッテー／
＼　＜＿＜　／
　＿∩　・ω・）∩＿
／、　　＿ノ＼
／　　（＿つ＾）　　＼

イ「すぷらったー！　作者の顔が某賭博漫画みたいに『ぐにゃあ～』ってなってる！（福本作品を知らない方居ましたらごめんなさい）」

タ「ひっひっひ……ワシのイーピン……！（福本作品以下略）」

イ「ちなみに作者は麻雀大好きだそうよ。ある雀荘で裏メンやってたこともあるそうで」

（裏メン：裏メンバーの略。麻雀は四人でするゲームですが、店の人数がハンパでゲームを開始できない場合などに客のフリをしてゲームに参加する店側の人。所謂サクラ）

タ「んー。教師としては、賭け事は褒められないなー。喝っ」

イ「えー。いいじゃん、別に」

タ「否ッ！　やはり賭け事はやらないのが一番なのです！」

イ「むー。ま、確かに世間一般からはあまりいい目はされないでしょうね。じゃあ、そろそろ第四回始めましょうか」

タ「うむ！　第四回、タイガー道場！」

タ&イ「「はっじまっるよー！」」

タ「して、今回のお題は何ぞや」

イ「今回は、主人公にどんな候補が上がっていたかをご紹介しようかなって」

タ「なるほど、では主人公をお呼びしようではないか。サモン・八海山澪！」

ガラッ

八海山澪「……失礼します。道場に来るように言われて来ましたが、何の用ですか藤村さん」

タ「ウェルカム魔境へ！　当道場は誰でもウェルカム……！」

澪「いや、貴方が呼んだんじゃないんですか。ところで、この悪魔娘っぽい女の子は誰？今時ブルマとか、扇情的な気が」

イ「パンツじゃないから恥ずかしくないもん！」

澪「いや、見るからにパンツじゃないし。……私って突っ込みキャラだったのだろうか」

イ「ま、そんなことは置いといて。これを持ちなさい」

澪「……何コレ。何て言うか……子供向けのオモチャみたいな。なんか割烹着の女の子が見えた気がするんだけれど」

タ「じゃんけん、死ねェッ……！」

澪「ひでぶっ！？」

イ「やったー！　採血完了！　さあ目覚めるのよ、不愉快型魔術礼装カレイドルビー！」

ルビー「……ふっふっふ。凛さんに代わって面白そうな生贄……もとい、協力者が現れるとは……」

澪「生贄って何よ！　うっ……体が動かない……？」

ル「無駄です！　契約は私主導で全て行われます。既に澪さんはマスター登録されました！　もはや逃れられませんよー」

澪「な、なんて迷惑な……！」

ル「さあ、プリズム☆トランスですよマスター！　平行世界の八海山澪を引き寄せます！」

澪「や、ヤメロー！　死にたくなーい！」

ル「無駄です！　さあ、行きますよー！」

カッ！

タ「おお……！　なんと神々しい光……！」

イ「禍々しい気もするけれど……！　あ、光が収まっていく……」

澪「……」

タ「ふっふっふ……。新しい力を手に入れた気分はどうだね、改造人間ミオーン」

澪「……ふぇ？　私改造されたんですか？」

イ「おおっとう……。子犬属性と来たか……！」

タ「まあ良い……。さあ行くがいいミオーン！　ヒロイン共を蹂躙しつくして、私達に出番と活躍の場を持ってくるのだ！」

澪「そんな……争いごとなんてダメですよぅ」

タ&イ「「改造失敗してんじゃねーかッ！」」

ル「はい。この澪さんは極度に戦いを嫌うという設定です。一応、こういうのもありました」

タ「むー。キャラは立つかも知れないけど、これじゃあ話が進まないでしょ」

ル「はい。これはこれで面白そうだと思ったそうですけれど、こういうのは別の話でやったほうが良い判断したそうです。聖杯戦争じゃ、こんなキャラは速攻で死にそうですしね、あはー」

イ「えーと……澪、ちゃん？　貴方何か出来るの？」

タ「おお、それは気になる。主人公というからには何かアビリティがあると見た」

澪「……さあ？」

タ&イ「「うぉぉおおい！」」

ル「一応、固有結界持ちという設定です。現段階でそれに目覚めた澪さんが居なかったので……。下に詳細を掲示しますねー」

・　固有結界『全てこの世は事もなし（オールズライト・ウィズザワールド）』

五大元素の全て性質が不活性状態で存在する完全秩序（コスモス）の世界を作りあげる。あらゆる魔術や宝具の起動及び実行が不可能となる。

事実上、この世界の中では如何なる魔術師も一般人と同等の能力しか持ち得ない。サーヴァントすらこの世界には存在できない。

タ「ふむ……。つまり“そげぶ”ということだな！」

イ「ちょっ……タイガー！　それ前回でわかんない人沢山いたじゃん！」

タ「構うものか！　この道場はハジけたものが勝者なのだ！」

澪「……楽しそうですねぇ」

ル「ですねえ」

タ「ぐ……やりにくい……！　チェンジ！」

ル「了解ですー。お次はこんな感じですかねー」

カッ！

澪「……あっはっは！　いやあ、二人が楽しそうで何より！」

タ「おおっと……今度は急にハイテンションだぞう。零観くんみたいな感じがする」

イ「で……貴方のアビリティとかは？」

澪「私の能力はそこまで大げさなものではない。私の特性は『揺らす』こと。大気を振動させ、音波によってああだこうだする魔術を扱う。いやあ、固有結界などと大げさなものは使えないよ！　あっはっは！」

イ「す、すごいバカっぽい……！」

タ「う、うむ……！　設定はそれなりに使えそうだというのに、この性格は原作キャラを食いかねない……！」

ル「そーなんですよねー。魔術のほうも普遍性が有りすぎて、下手をすると士郎さんや凛さんを負かしてしまいそうなんですよねー。超音波とかどうやって防げばいいんだっていう話ですしねー」

イ「昨今では、主人公最強とかもあるみたいだけれど？」

ル「ええ。ですが、作者は『主人公最強とかチート能力ものとかは、絶対書かない』と公言して憚らないものですから。完全オリジナルならともかく、原作が存在する作品でそれを書くことは無いかと」

澪「あっはっは！　固有結界持ちなんかには勝てないよ！」

ル「いや……音は拡散&回折するので、澪さんが先攻を取ったら相手は回避不可能に近いのですよ」

澪「ふーん……よく分かんないや、あっはっは！」

タ&イ&ル「「「バカだ（ですね）……」」」

タ「つ、次！」

ル「次からは、主人公候補というよりも『こういう澪も居たかも知れない』程度のものですねー。最初は『腐った八海山澪』」

タ「……はい？」

澪「弓受け一択でしょう、常識的に考えて」

イ「す、すごいダメな気がする……！」

澪「そう…そのまま飲み込んで。僕のエクスカリバー…」

タ「アウトオオオオオ！！」

ル「逆に、『百合な澪』」

澪「あら……可愛い子ね。お姉さんと一緒に、一晩中イイコトして遊ばない？」

イ「え、ちょ……た、助けてタイガー！」

タ「き、きえええ！　喝！」

ル「ここで藤村さんには食指が動かないというのがミソですねー、あはー。次は『病弱な澪』」

澪「いやー、今日も空気が美味しいなあゴパァッ」

タ「有毒ガスッ！？」

イ「きゃー！　夥しい量の血を吐いたー！　衛生兵（メディック）、衛生兵（メディック）うう！」

ル「では『医者な澪』さんを」

澪「るーるるるー♪　私はステキな外科医(サージェン)よー♪　有毒ガスを吸ったのね？　なら簡単よ！　肺を切り開いて中身のガスを抜けばいいんだわ！」

タ「やたらと物理的！？」

イ「つか、それじゃ解決できないと思います！」

ル「お次は、『占い少女な澪』さん」

澪「この壺を買わなくては、貴方に不幸が訪れますよ……ヒッヒッヒ」

タ「悪徳！」

イ「致命的に占い少女の定義を間違えているような気がします、ししょー！」

澪「貴方の恋愛運は最悪ですな。この冗談にならないくらい高額な御札を買えば、運命は変わりますよ……。イーッヒッヒッヒ……」

タ「ぐ……。一瞬迷った私が恨めしい。つ、次だ！」

ル「次は『格闘派な澪』さん」

澪「北斗有情破顔拳！」

＼　テーレッテー／
＼　＜＿＜　／
＿(　・ω・)＿

／、　　｜ノ＼
／　（＿つ＾）　　＼

タ「天丼っ！？」

イ「ぬうう……作者め、ロクに『北斗〇拳』知らないくせに……！」

ル「次は、『探偵な澪』さんです」

澪「貴方を犯人です」

タ「うおおおお……洗脳されるううう」

イ「せ、洗脳探偵……！」

ル「あらあら、まさか翡翠ちゃんが出てくるとは。……おや、そろそろお時間ですか。仕方ないので、澪さんは元に戻しておきましょう」

澪「ハッ……！　わ、私は一体何を……う、うおお……恥ずかしい……っ！」

ル「あはー、その羞恥に悶える姿、グッドです！」

b（サムズアップ）

タ「え、えーと……と、とりあえず今回のタイガー道場はここまで！」

イ「またねー！」

【タイガースタンプが押されました】

第四話　澪で遊ぼう（後書き）

アスキーアートなんかを使ってみましたが、これ環境によってはズレると思われます。その時は脳内で補完してください。

そして今回から台本風にしました。やっぱり科白オンリーだと無理がありますね。せめて誰が喋っているのか程度はわからないとダメだと判断しました。

読者の方で麻雀好きな方いらっしゃいましたら、是非一緒に打ちましょう！ｗ

次回は相変わらず未定。気長にお待ちください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6299k/

ねくすとタイガー！

2011年8月1日23時02分発行